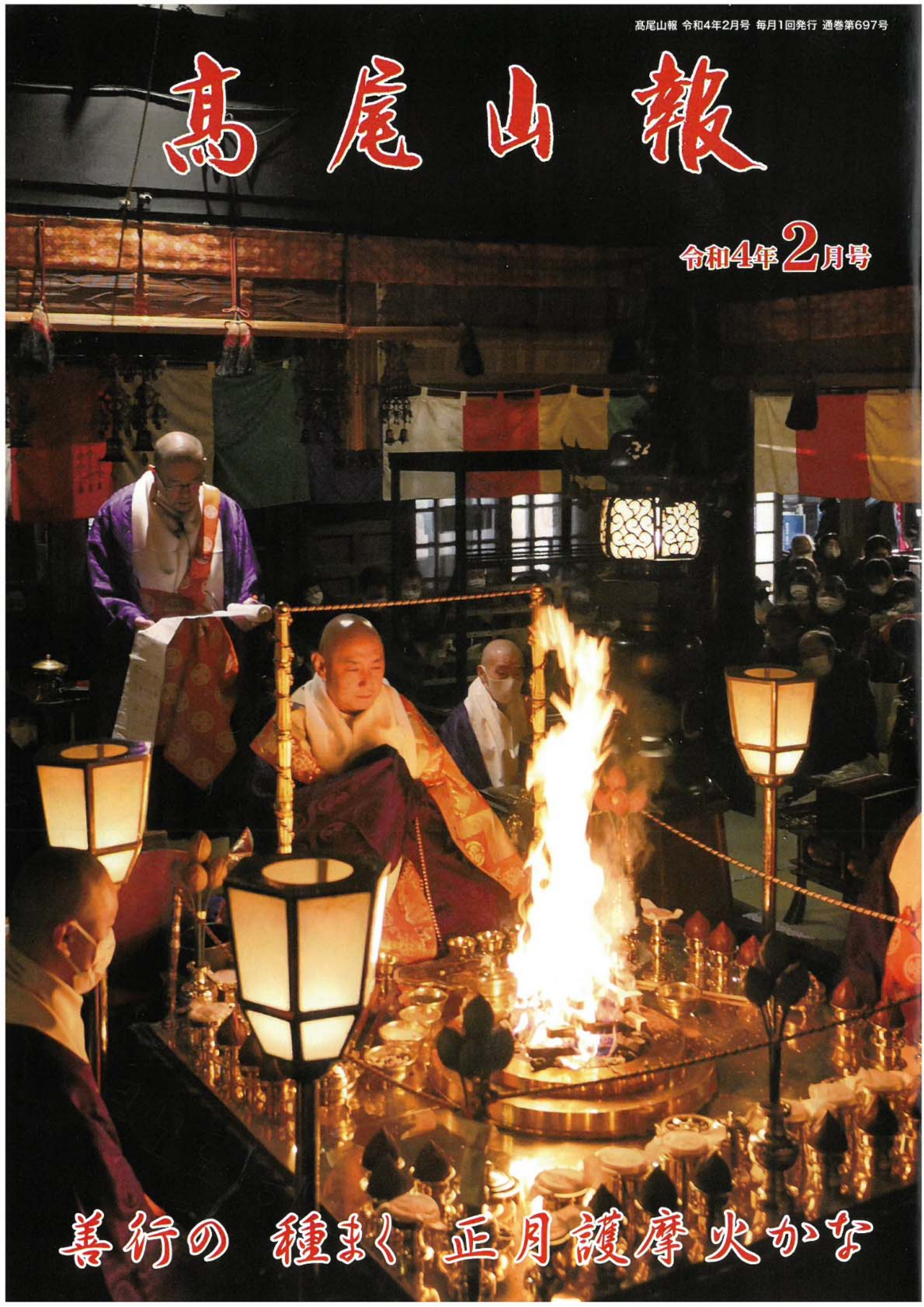


高尾山報

令和4年2月号



善行の種まく 正月護摩火かな

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(116)

春されば

まつ咲く梅の花

独り見つづや

春日暮らさむ

（『万葉集』山上憶良）
春になると真つ先に咲く庭の梅。その花をただ一人眺めて春の日を過ごすか。いや、それはできないよ）

立春を迎えて、吹き渡る風にも、どこなく暖かさが感じられるようになってきました。庭先の草花も日に日に芽吹いて、春の訪れを喜んでいくかのようです。まさに華やぐ季節の到来です。

この「春されば」の歌では、春に先駆けて咲き出した梅の花が詠われています。それは、独り占めするには勿体ないほどの愛らしい姿だったのでしよう。

が振られていることから「明るく晴れやかな顔つき」を表現しているのでしょう。

「無財の七施」を説く『雑宝藏経』というお経には、「和顔悦色施」について「父母・師長・沙門・婆羅門に、響聲悪色せず」と見えます。ここに「響」も「しかめつ面」を意味します。そのような表情は「悪相」（恐ろしい人相）となるのでしょう。私も相手の気持ちを考えずに行動をして「響」を買った一経験がありますが、眉をひそめるような顔つきもまた、周りの人に伝わってしまうようです。

「響一笑」という言い回しがあります。人は日々の生活の中で、楽しく笑ったかと思えば（響）、急に顔をしかめたり（響）、ささいな刺激によっても顔色が変わってしまうものです。いつも仏さまのような「和顔」でありたいと願いつつ、怒りや恨み、



春に先駆けて咲く梅の花

妬みや憎悪といった「負の感情」は、なかなか抑えきれません。

ちなみに、仏さまの表情は「アルカイク・スマイル」とも呼ばれる温かな微笑みをたたえています。一方、「仏頂面」という言い方も耳にします。「仏頂面」は「仏頂尊」という仏さまの恐ろしい形相が「無愛想」に見えたところから名づけられたとか。仏さまの

深い思索のお姿が、そのように目に映ったのかもかもしれません。

「和顔」（微笑み）をめぐっては、奈良時代の僧侶、行基菩薩（六六八～七四九）と智光法師（七〇九？～七八〇？）との逸話があります。以前の『高尾山報』「法の水茎」25（高橋秀城）「法の水茎」104頁「笑顔で悲しみを隠して」でも触れましたが、行基に嫉妬

して地獄に落ちた智光は、閻魔王（地獄の神）に許しを請うて、再びこの世に生き返ってきました。身体が回復すると、智光は行基のもとへ嫉妬心の罪を謝りに行きました。行基は智光を見るとき、神通力で智光の思いを汲み取りました。にっこりと笑みを浮かべると、思いやりの心をもって「どうして、長い間お目にかかれなかったのでしょうか」と話しかけました。

戻つてきましたが、ここに恥をさらして白状します。どうか罪をお許しください」と。行基は、顔を和らげて黙っておられたままでした。

（藤原高遠『大式高遠集』）
春風によつて咲いた花の色香は、昔の人の面影（顔かたち）のようだよ）
「ほほえみ」は「頬咲み」とも書きます。厳しい冬を乗り越えた花々にも華やいで、頬も緩んでくるでしょう。草木の「和顔」に心えるように、私たちも微笑みを絶やさず、この辛い世の中を明るく生きていきたいものです。
（栃木北部教区普濟寺）

春風に

笑みを開く

花の色は

昔の人の

面影ぞする



チェンソーアート「寅」 作・城所 ケイジ

院内散歩

薬王院の展示物

59

晋山式のお知らせ

令和四年四月六日 大本山高尾山薬王院中興第三十三世貫首 佐藤秀仁僧正の晋山式を執行致します



山中遊品さんによる奉納舞



御信徒の諸願成就を祈念する佐藤貫首



やったね大吉だ、そっちはどう？



初詣に訪れたオリンピック金メダリストの三宅義信さん



大本堂内で祈りを捧げる参拝者



二年詣りに訪れた御信徒の皆様

善男善女が幸福を願う
新春に祈る 高尾山初詣
 令和四年 壬寅 (みずのえとら)



境内で行われた迎光祭では初日の出を祝う

令和四年壬寅の新年を迎えた大本堂では、世界平和、国土安穩、疫病退散、東日本大震災早期復興、家内安全、身体健全、身上安全、心願成就、その他諸願成就を祈り、佐藤貫首御導師のもと、新春特別開帳大護摩供が厳修されました。

昨年、一昨年に続き、新型コロナウイルスによる感染症が流行しておりますが、お正月の高尾山には、全国各地から御信徒の皆様が訪れ、御本尊様との御縁を深められておりました。

例年では元日の明け方には山頂に祈禱所を設け、登山者と共に初日の出を祝う「迎光祭」が行われますが、昨年同様に大晦日から元日の朝にかけて、山頂への入場規制が行われたため、境内地に祭壇を設け、迎光祭を行いました。迎光祭では好天に恵まれて晴れ渡り、僧侶の読経と共に立ち昇るきれいな御来光を

拝することが出来ました。先般告知しておりました通り、薬王院においては感染症対策の為、大本堂への入場制限を行い、通常有喜閣で行っている新年の挨拶(おとそ)を中止とし、また信徒休憩所の使用中止、境内各所での換気の徹底や、消毒液を設置、またお護摩受付所やお札場での飛沫感染防止ビニールガードの設置など様々な対策を実施致しました。

御来山の皆様におかれましては、マスク着用や間隔をあけての本堂参拝、普段とは時期を変更しての分散参拝などの感染症対策にご理解、ご協力を頂きまして、誠に感謝申し上げます。

未だ感染症終息への見込みがつかぬ昨今ではありますが、来年のお正月には是非とも多くの御信徒に御来山を頂き、また安心して初詣を行って頂けますよう、山内一同御祈願を続けて参ります。

高尾山年代記

26

明治大学博物館 外山 徹

十四世秀永3 高尾山信仰の興隆前夜



東都名所 芝 増上寺(歌川広重) 国立国会図書館デジタルコレクション

高尾山信仰の興隆が兆した秀永の時代。元禄といふ時代は生類憐みの令ばかりではなく、寺社参詣を含む文化的営為の活性化という点でも、特筆すべき時代であった。

元禄と正徳の時代

將軍徳川綱吉の厚い信心から護持院(千代田区・現存せず)、護国寺(文京区)、東大寺大仏殿をはじめ諸国で寺社の造営・修築が盛んにおこなわれ、庶民による寺社参詣も盛行した。世に言う元禄文化の時代、さまざまの文芸・芸術が花開き、井原西鶴(小説)、松尾芭蕉(俳句)、近松門左衛門(浄瑠璃)、市川團十郎(歌舞伎役者)、菱川師宣(浮世絵)、尾形光琳(絵画・工芸)といった名だたる文化人が輩出されている。都市における消費文化が発展し、町人の暮らしにも華やかな彩が添えられるようになった。一方で、こうした傾向は万事に華美の弊風を生み、

幕府や大名間の儀礼・贈答も奢侈を極めたものとなり、財政の窮乏を招くに至った。

宝永四年(一七〇七)十一月、富士山が噴火、風下にあたる駿河(静岡)、相模(神奈川)、武蔵南部(東京)、には火山灰が降り積もり甚大な被害をもたらした。高尾山山においてもその噴煙を吐き出す山容が望見され、火山灰の黒雲が流れる様が目の当たりにされたに違いない。この噴火はかえって神威として受け取られたようであり、その後、富士山への参詣者は増加傾向を見せ、富士山周辺では離農者が参詣客相手の生業に転じる状況を生じた。それもまた、高尾山信仰興隆の背景になったと考えられる。前回取り上げた護摩檀家帳「永代日護摩家名記」では、噴火の翌宝永五年から享保前半にかけての一〇余年に顕著な檀家数の増加が見られる。

宝永六年(一七〇九)一

月、將軍綱吉が薨去。秀永は二月二日に上野寛永寺にて納経・拝礼を勤めている。子の無かった綱吉の後継となつたのは、甲府藩主である甥の綱豊だった。家宣と名を改め六代將軍に就任。同年四月二日には代替御礼があり、秀永はこれに参列している。

側用人間部詮房、儒学者の新井白石が補佐した家宣期の政治は正徳の治として知られる。生類憐みの令の停止、朝廷との関係の円滑化、朝鮮通信使への礼法改正と接遇の簡素化など、好意をもつて受け止められたが、綱吉時代から積み残された課題として、財政の回復までには至らなかった。志も半ば、家宣の治世は三年半と短かった。病を得て正徳二年(一七二二)十月に薨去。秀永はわずかの年月をおいて、再び將軍の法要に参列することになった。

將軍との儀礼

実はこれまでの將軍家

との儀礼に関する記事は、全て天保四年(一八三三)の由緒書に拠ってきた。その記事は二世祐清による寺領領知の朱印状拝受から始まる。正月の年頭礼は慶安二年(一六四九)のみだが、頻度が高いことから以降は省略されたものか。葬礼は三代家光の時からで、四代家綱の時には再度朱印状の拝受、就任時の代替御礼も家綱時から見られるようになる。以降、將軍交代のタイミングで葬礼、代替御礼、朱印状拝受が繰り返されるが、江戸中期以降にはそれらに係わる同時代の史料が残るようになる。歴代山主の息遣いが感じられる場面として機会を見て紹介してゆきたい。

その將軍との儀礼に係わる同時代の史料として最初のものに、正徳二年十一月八日に増上寺でおこなわれた家宣の法要への参列手順について江戸触頭真福寺からの伝達事項の記録がある。参列

の様子の一部始終が明らかにになるので、順を追って紹介してみよう。

それによると、供揃えは八名。表門(芝大門)・現在のものは再建にて下馬の後は納経を捧持する伴僧と草履取の二名を伴い、山門(三解脱門)・現存)の内、左側の御影堂に卯の刻過ぎから辰の刻(午前六〜八時)までに集合。納経を持参する伴僧は指図により本堂の階段下へ進んで役僧へ渡す。文書の記載によると、この時、山門と本堂は口の字形に仮設の回廊で結ばれており、秀永は山門から左へ南側の回廊を進んで本堂に入り、拝礼をおこなうことになっていた。本堂の内では、「僧正紫衣」「院家」「独礼寺院」「惣礼寺院」の別によって拝礼の席が分かれており、前者は堂内埋敷居内側の祭壇に近い位置、薬王院が該当する独礼寺院は埋敷居の外畳一枚目、惣礼寺院はさらに外側の畳二枚目と位置が定められて

いた。「僧正」は各宗派のトップクラス、「院家」は上方本山の住持クラス、薬王院のような地方本寺クラスは「独礼」の寺格にあり、こうした儀礼の場においては、諸大名同様にその格式が可視的に表象されていたのである。拝礼後、一方通行で北側の回廊から退出することになっており、ここで納経の伴僧と合流するようになっている。当日は多くの僧侶が続々と回廊を進み、拝礼をおこなったものだろう。

享保時代の到来

さて、家宣の継嗣鍋松は満四歳の誕生日の以前にあつたが、幼少ながら七代將軍に就任した。明けて正徳三年一月六日代替御礼がおこなわれ、秀永も参列の記録がある。家継は三年後病の床に着くと呆気なく病死してしまつた。秀永は綱吉の法要以来、わずか七年ばかりの間に三度の法要に参列することになった。

天逝した家継に子はなく、ここに徳川宗家の血は途絶えた。家継の末期に際し、徳川御三家当主が協議の結果、後継は紀伊家当主の吉宗に決まつた。吉宗は宝永二年(一七〇五)、兄二人の急逝をうけて和歌山藩主となつていたが、藩財政は火の車だった。儉約政策を布くとともに、農村の灌漑整備と新田開発によつて徴税基盤の強化に努め、武芸の修練を奨励し、学問所を設立するなどの政治手腕が評価されたと言われている。

將軍就任後、儉約令や年貢増徴による財政再建に取り組み、大岡越前守をはじめ積極的な人材登用策を推し進め、公事方御定書の編纂に結実する司法制度の整備に尽くすなど、その治世は新たな時代の幕開けとなつた。この、改革で知られる享保(一七一六〜一八〇四)の時代は、その史料の残存状況からして、高尾山史研究の上でも画期をなす

ことになる。

さて、秀永は天保の由緒書によると享保元年(一七二〇)七月三日、將軍就任にともなう代替御礼に参列し、江戸城本丸御殿帝鑑之間において吉宗に拝謁している。翌々年の七月一日に寺領朱印状を拝受したことになっているが、殿中儀礼の確立経緯とその後の動向からしても、これらは事実であろう。しかし、気になるのは朱印状拝受に続く「同四月十六日放生会御奉納」という記載である。放生会とは鳥や魚を野山や湖沼に解き放つ殺生禁断の思想に基づく儀式である。「御奉納」とあるからには、これは吉宗の意向によるものという意味に取れるが、この放生会奉納とは一体いかなる事なのだろうか？

※1 朱印状更新は家宣・家継の就任時にはおこなわれていない。

※2 寺社奉行の配下として寺社行政を司る愛宕真福寺ほかの寺院。



書院 松の間にて記念撮影する佐藤貫首と内局の皆様

総本山智積院 内局御一行 年賀に来山

去る二月十八日、真言宗智山派総本山智積院より、芙蓉良英宗務総長をはじめとし、三神栄法総務部長、山川弘弘教学部長、服部融亮教化部長、大森真弘法務部長、日下敬啓財務部長、倉田隆伸宗務出張所長の皆さまが来山されました。
御一行は、到着後大本堂で法楽をお勧めされ、山内僧侶・職員の出迎えを受け、佐藤貫首と当山書院・松の間にて新年のご挨拶を交わされ、しばし歓談の後に下山されました。



演習に参加した皆様



一斉放水を行う各隊員

みんなで守ろう文化財 文化財防火デーに消防演習を実施

一月二十六日は毎年「文化財防火デー」です。この日は日本各地で防災訓練が行われており、本年は高尾山上でも消防演習を実施致しました。
演習では、八王子消防署や高尾登山電鉄自衛消防隊協力のもと、薬王院の職員で組織する高尾山自衛消防隊が参加し、消火器や消火栓からの一斉放水などの火事を想定した消火訓練や、救護訓練が行われました。
佐藤貫首は挨拶の中で、「薬王院は江戸時代から伝わる多くの文化財を保有しているが、お山の上という環境で消防車の通行が困難であるため、まずもって一人一人が火事を起こさないことを心がけ、高尾山一丸となって守ってゆこう」と話されました。
訓練に際しては、御参拝や登山の皆様のご不便をおかけ致しましたが、ご理解ご協力を頂き、感謝申し上げます。

当山貫首・総本山智積院 冬報恩講ご出仕

総本山智積院において、冬報恩講が行われ、当山の佐藤貫首が昨年宗派において菩提院結衆に列座された為、古来よりの慣例にない、十一日夕刻から明朝にかけての陀羅尼会において供養導師の役を勤められました。

冬報恩講とは、真言宗中興の祖である、興教大師・覚鑿上人の御遺徳を偲び、その功績に感謝し、その恩に報いることを目的に行われる法要です。御命日である十二月十二日を期して法会が修されます。その法会では、学恩に感謝して真言宗の教義を問答する「出仕論義」や、「陀羅尼会」、「御法事」という三つの法要で構成されており、

特に「陀羅尼会」では、覚鑿上人が祀られている密厳堂で、尊勝陀羅尼を一晚中誦する法要で、その間導師は上盤修法して朝まで勤修するものです。現在では時間は短縮されておりますが、内容は古式に則り行われております。

十二日、金堂における御法事をもって全法要を終え、最後に智積院会館において、参拝者及び出仕者・随喜者各位に根来汁の接待がなされ、冬報恩講は無魔成満の運びとなりました。



陀羅尼会で供養導師を勤める佐藤貫首

大北斗供養(星まつり) 十二月二十一日~二十二日

昨年の十二月二十一日から二十二日にかけて、大北斗供養(星まつり)を厳修致しました。
星まつりとは、皆様に巡り来る九星に祈りを捧げ、災厄を除き福運を招く祈禱で、冬至前日の夕方に始まり、冬至の朝に終わります。
佐藤貫首大導師のもと、山内僧侶総出仕で、御信徒皆様の除災開運や、各位の諸願成就を一心に御祈念致しました。



初甲子大黒天祭 一月十一日(火)



クコの木御奉納者御芳名
八王子市 青木 智恵子
" " 安藤 節子
" " 白井 政美
八王子市 佐宗 愛子
" 佐宗 千明
(順不同・敬称略)

観音菩薩の宗教

50

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子 (その13)

前号で引用した寛文版『聖徳太子伝』における太子自身の来世に関する予言を現代語訳してみよう。

「その時、太子は小野(妹子)大臣に告げておっしゃることに、

『大和の国(現代の奈良県)は我が王朝の中心であり、日本は比べるもの無き靈に満ちた地です。仏教の教えも天皇の政治も、この国より始まって、(仏教の仏菩薩が)神々に姿を変えてこの地に顕現なされた。東南の山の方角の麓には、釈迦如来の教えを弘める大いなる光明が輝いていらつしやる。私が入滅の後百年経つて、(神代以降の)人間の天皇の四十五代の

天皇として生まれ、釈迦牟尼の教えを弘める光明の(輝く)場所に大きな仏(像)を造り、大伽藍を造るであろう。このようにおっしゃったので、小野の大臣はこれを(聖徳太子が未来を予言した『未来記』)として記録なされた。とうとう(太子が薨去なさると)その『未来記』のお言葉に違わず、(第四十五代の天皇である)聖徳天皇としてお生まれになり、日本一の大伽藍である今の東大寺を建立し、金銅の十六丈の毘盧遮那仏を安置なされたのである。』

上記の文には少々解説が必要であろう。最初に見える小野大臣は、『日

本書紀』によれば太子が制定した冠位十二階の最高位である大徳に任命された推古朝時代の高官で、遣隋使に派遣され隋の皇帝・煬帝に面会した。この時、携えた日本からの国書に記されたのが、『隋書』の伝える有名な「日出處天子致書日沒處天子。無恙云云。」である。それらが事実であるならば、小野大臣と太子が交流していたことは「歴史的事実」と認められる。

一方、次に述べられた小野大臣への太子の言葉は、「太子信仰」あるいは伝説の範疇に入れるべきものである。太子は日本について神仏の顕現する国としたうえで、辰巳の方向にある山をブツダの教えが光り輝く土地と述べている。この山の名称は明示されていないが、奈良の辰巳すなわち東南には吉野山があり、その麓に東大寺が建てられた。ここに言われる「辰巳の山の方」(前号では



東大寺を建立した聖徳天皇は聖徳太子の生まれ変わりとなされた (絵・橋本 豊治)

「辰巳の山」としたが筆者の誤記で訂正する)は吉野山を指すのである。太子は自分の死後、百年後に第四十五代天皇の聖徳として転生し、大仏と巨大寺院を建立するのであると予言した。これがすなわち東大寺と毘盧遮那仏である。太子の薨去は本年二〇二二年四月八日であろうと千四百年のご遠忌、聖徳天皇の誕生は七〇一年であるから、実際には太子

の死後七十九年で生まれ変わったことになるが、上記の予言では百年後とされている。太子の聖徳天皇への転生については、古く九世紀の『日本靈異記』が述べており、それは「皇室の神聖の權威の獲得と、仏教における正統性の主張のため、時の天皇と聖徳太子の密接な関係を強調する」(高橋 事久「聖徳太子信仰と親鸞」『印度學仏教學研究』所収、一九八三年)

意味があつたとされる。それが江戸期の『太子伝』でさらに江湖に広まったこととなる。

『太子伝』は、太子の口を借りて語るのみならず、地の文においても太子から聖徳天皇への転生を明確に述べている。

「太子、御入滅の後、推古天皇より十二代を経て、人皇四十五代聖徳天皇と、太子、ふた、びむまればかり給ひて、日本第一の伽藍、東大寺を建立あり。はじめて、戒壇をたて、菩薩戒をひろめ給へり。その時に、聖徳天皇、菩薩戒の受文の序を自筆にあそばされけるにも、菩薩戒弟子沙弥勝鬘と云給へり、と云々」(『太子伝』巻五、杉本校訂本、一九五頁)

これは太子十九歳のときの出来事として記された文である。文意は難解ではないので現代語訳は省略し、若干の解説をしてみよう。

ここでは、太子が入滅後に聖徳天皇として生ま

れ変わったことを断定している。聖徳天皇は東大寺を建立し、日本で初めて東大寺の中に戒壇堂を設立した。戒壇とは、出家する人にこれから守るべき戒律を授け、正式に僧侶とする道場である。日本には正式な戒律に基づく出家の作法がなかったことを案じた聖徳天皇は、光明皇后とともに唐より鑑真和尚を招き、彼を戒律の師として戒壇堂を建てた。鑑真は戒壇を護持・継承する高僧で、度重なる苦難のすえ、失明して日本に到着した。その様子は伝記『鑑真和尚上東征伝』や『東征伝絵巻』に活写されている。また、その生前の姿は鑑真和尚上坐像(唐招提寺蔵、国宝)として制作され、今でも教科書を通じて広く知られている。聖徳天皇が出家して「沙彌勝鬘」と称したことは『続日本紀』などが伝えているが、『太子伝』が述べるように「勝鬘」ではない。沙彌とは男性

の僧侶の意で、勝鬘が出家後の名前である。前述のごとく、聖徳太子は観音菩薩を起源とし、初めに天竺の勝鬘夫人として転生した(『観音菩薩の宗教』④参照)。「太子伝」は同音の「しようまん」を以て聖徳天皇と太子との関係を示唆したが、文字の相違は作者の誤読によるものか、意図的な改変かは不明である。

も示唆する記述である。太子は自ら聖徳天皇として転生すると宣言した後、さらに未来の出来事を予言している。それについて「太子伝」の述べる太子の言葉は以下の通りである。

「明る日は、宇治橋をかけて、太子、行幸なり給ふ時に、いまの平等院の霊地、みそなはしてのたまはく、

「我入滅の後、四百余歳をへて、この所に、伽藍を建立あるべき地なり」と、のたまひければ、まことに人皇六十六代のみかど一条院の御時、御堂の関白道長の御願として、寛弘八年に、いまの平等院をこんりうし給へり」(『太子伝』巻七、杉本校訂本、三〇二頁)

上記の「明る日」とは、太子が聖徳天皇として生まれ変わることを予言した翌日のことである。宇治橋は日本最古の橋とされ、太子の発願により架けられたとする伝承がある。『太子伝』によれば、太子は自らと縁の深い宇治橋に行き、その地をこぞになり「私の死後四百年の後、この場所は伽藍を建ててしかるべき土地である」と予言した。平等院が建立されたのは一〇五二年、太子薨去の四三〇年後であるから、「太子伝」の伝える四百年はおおむね正しい。ただし、平等院の創建は永承七年(一〇五二)である。「太子伝」が伝えたのは、太子の神聖性、超人性であるから、年代等の正確性は必ずしも問われない。重要なのは、聖徳太子が観音菩薩の転生者であり、未来を知る能力を有する聖人であることである。聖徳太子の予言の書は『未来記』と呼ばれ、その実在性はいまだ不明であるが、『太子伝』等が伝えるように予言者としての太子も平安期以降、盛んに信ぜられるようになっていった。このことについては別稿にてさらに考察したい。

いけばなの心 ②4

華道教授 佐藤 宗明

時代を遡れば、いけばなの花材は山野から探してくるものだったと、聞いておられます。冬の時期に、きれいな花を咲かせた草木を手に入れるのは、大変な苦勞だった事でしょう。

今回は寒さが抜けない二月にも花を咲かせる、椿を使った生花正風体をご紹介します。今回の作品では白玉椿という、白い花びらで少し抱え込まれたような、控えめな花をつける品種を使用しました。十月〜三月頃に花を咲かせ、冬にあっても私達の目を楽しませてくれます。

生け方は「椿一輪」といい、池坊古来のものです。花を一輪、葉を三枚半のみ使用して形を整えます。枝も一本で整えるものとされ、使っても二本までという事で、枝の見立

てが非常に重要となります。『一輪にて数輪に及ぶならば数少ないは心深し』という言葉が伝えられておりますが、「椿一輪」生けは枝を選び、花葉を厳



花材：椿

選し、必要最小限までに草木の本質を見つめていく、省略の極みとも言われる生け方です。現代では生花店には冬でも色鮮やかなお花が並び、いつでもお花を愛でることが出来ます。ありがたい事だと思います。だからこそ、一輪の花が目の前にあるありがたさを忘れずにお花を生けていきたいと思えます。

祝・八王子車人形が 国の重要無形民俗文化財に

八王子市が世界に誇る伝統芸能「八王子車人形」が、国の重要無形民俗文化財にふさわしいものとして、国の文化審議会より文部科学大臣に答申されました。今後、官報告示をもって正式に指定される予定です。

車人形は「ろくろ車」といわれる車付きの小箱に腰掛けた演者が、浄瑠璃や義太夫節に合わせて文楽に似た人形を一人で操ります。人形の構造は他に類を見ないといわれ、動きに自在性があることが特徴です。現在では海外公演も多く催されており、日本のみならず世界で活躍されており、八王子車人形を伝承する「西川古柳座」は高尾山とも縁が深く、節分会への参加や、高尾山若葉まつり、高尾山もみじまつりでは公演を行っており、また、日本遺産に指定された「霊気満山 高尾山」の「人々の祈りが紡ぐ桑都物語」では構成文化財に指定されました。



高尾山物語 46

高尾山の文学碑

絵・橋本豊治



文学碑の路
百八段の階段(男坂)の頂上から、馬道(女坂)との合流地点までは多くの文学碑があるため、文学碑の路と呼ばれております。

自然あふれる高尾山には、古来より多くの文人が訪れて四季の折々を詠んだ作品を残し、多くの文学碑として建立されております。

特に昭和三十・四十年代には全国的に文学碑を建てる機運にあり、当時の山本秀順貫首が多くの文学碑建立に尽力されました。昭和三十七年には、高尾山で初めての文学碑として、次の和歌が記された北原白秋の歌碑が建立されました。

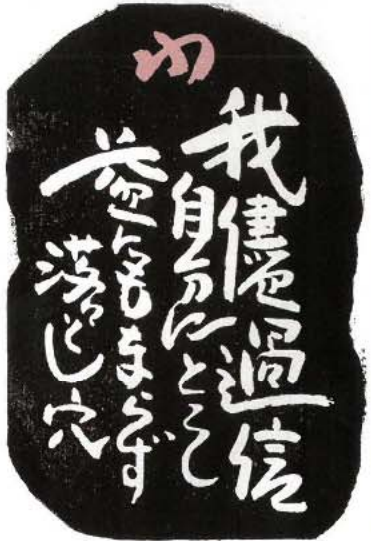
こもる高尾は
夏雲の
下谷うづみ
波となづさふ

建立されている文学碑は、北原白秋や水原秋桜子といった有名な文学者の他に、薬王院ゆかりの人や、地元で知られた俳人・歌人など様々です。文学碑以外にも、井田誠一の「若いお巡りさん」や北島三郎の「高尾山」といった、歌詞碑も建立されております。

いろは

天狗の落し文

⑬



わ 我儘過信 益にもならず 落し文

我儘とは、自分の思い通りに行動しようとする意味で、過信とは根拠の無い自信を持つことです。そんな人は、周囲に配慮することなく、常に自分が満足するように行動します。

自己中心的な態度で振る舞い続けると、周囲の人達に嫌われてしまい、自然と人が離れてゆきます。そのような状況にならないために、他人を自分と対等な存在であると尊重し、行動を続けていけば、自分が苦境に陥った場合でも、助けてくれる人が、きくと現れるでしょう。

折り折りの記 (140)

波多野 重雄

高尾山に豆を撒く声木霊する

二月三日葉王院の節分会が春日和の中、佐藤貫首の元に袴姿の善男善女ご参集の上、盛大に開催された。今年も大相撲の玉鷲関の他、人気者招待者のご出席は節分会の花である。ケールパークの搭乗口では北島三郎像がにこやかにお客様をお迎えされる。華やかな地元の方者衆の高島田が日に映え節分会を盛り上げ、子ども達は舞台の豆撒く人々に大声で歓声を上げる。善男善女は高尾のお山の日暮れに別れを惜しむ。

(高尾山健康登山の会会長)

梅花祭

上七軒舞藝妓英

国宝正殿修復清

天満天神敬祭祀

女人男人絵画成

厚木市 荒井 一雄
いさびさの
京の都に京女
東男と絵に成りにけり
梅花祭
上七軒舞藝妓衆は
まるで花の蕾の如し
国宝本殿は見事に修復成り
清々しき梅が香
天満大自在天神様を
謹み敬ひて祭祀
女人・男人、絵画と成る

厄年を過ぎた
御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・二年を
八十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
九十才を過ぎたなら
一日・二日を
氣を付けられ
日々を大切に
圓滿にお暮し下さい
当山では皆様の
(身体健全
寿命長久)を祈念して
御護摩を
お申し受け致しております

高尾山の昆虫

カノコサビカミキリ

鹿は年に二回体毛が色変わりしますが、特に春から夏にかけての頃がとて美しく、柔らかな薄茶色の中に白い紋が多々散りばめられ「鹿の子模様」と呼ばれます。これは子鹿のみに表れる特徴ではなく大人の鹿にも見られ、林の中で活動するのにカムフラージュ的な効果があると思われています。数多いカミキリムシの中にカノコサビカミキリという和名を持つ種がいて、地肌は茶褐色で、上翅には鹿の子を連想させるような複数の白紋が入り、まさにネーミングの妙を感じさせます。本種はカラスウリの茎や枯れ蔓に集まっているのがよく見られ、表皮を後食することが知られています。晩夏に多く、触角は太短く上翅の半分までも届きません。何分にも五、十ミリの小型種のため見つけるのは簡単ではなく、カラスウリをピーティング(叩き廻)すると面白いように落ちてくることがあります。



(標本・小畑 裕 撮影・文松島 孝)

おはなし散歩道

こじらせギツネ

町田市 大澤桃代

昼前畑に行くとき、コンタが水仙を差し出した。「ツネコ、これ……」
「つて、もじもじしてる。あたしは、ふんつと鼻を鳴らす。女子のキツネは花を貰えば喜ぶと思ってる。嬉しい！ つて叫ぶのは簡単だ。でも、イトさんが丹精込めた水仙をプレゼントされたら、何か違うと思う。コンタのことは嫌いじゃないけど、告白はもつとスマートにしてほしい。あたしは町の生まれだからね。恋するには幼すぎ、それがコンタの良さだけだね。この村にきたのは、ひどい失恋をして、遠くで静かに暮らそうと思っただけ。それにしても繁殖期って厄介。異性が気になるし、素直になれないし、自分でも面倒くさい。あたしは昼間村を歩

く。町ではできなかったし、やってみなかった。人は、「キツネ、キツネ」って騒ぐ。子どもは追いかけてきて、石を投げたりする。静かすぎて難い。でも、イトさんは違ってた。畑で穴ぼこ掘ってるか、つて笑ってた。「ツネコ」つて名前もつけたのもイトさんだ。それから仲良しになった。イトさんは好きな時に起きて、気まぐれに野良に出て、畑で合つても知らん顔してくる。干渉しないし、プライドが高く斜に構えて、一人で過ごすのが好き。あたしと同じ性格。寝坊助で朝が弱いのも同じ。あたしは元々夜行性だけど、今はイトさんに合わせて暮らしてる。水仙を畑に置いて、コンタはしょんぼり帰った。

あたしは畑の土をほじくって待っている。イトさんは陽が上がりきってからきた。買い物でもしてきたのかな。あたしは畑に残った芋を食べてた。「さっきのキツネは、ツネコの知り合いか」
うん、とあたしは頷く。「コンタは素直だ、ツネコに合ってるよ」
イトさんは笑う。それから水仙を拾って籠に入れた。家に飾るんだらう。「こいらじや、初午にお稲荷さんを作るんだよ」
唐突に、イトさんが言う「あたしは首を傾げる。朝は苦手同士だが、いつもより早くおいでな」
イトさんと目が合う。朝庭の稲荷へこいつてことだ。稲荷ずしには目がない、だつてキツネだもん。畑から出て、村を歩く。時々、指をさされたり追いかけられたりするけど、知らん顔の人がふえた。昼間歩くあたしに慣れたんだらうな。車はめったに通らないし、川や風の音が聞こえる。いい村だな、あたしに合ってる。
ほとんどの家の庭に小さな鳥居があり、稲荷様を祀ってる。豆腐屋は行列だ。みんな油揚げを売ってる。稲荷ずしを供えて、豊作を祈るといふ。町にはなかった風習だ。
翌朝、甘い匂いが山に漂ってきた。匂いに誘われるように、朝のうちに村へ下りた。他のキツネのねぐらは空っぽで、あちこちの草むらでキツネが稲荷ずしを食べていた。
イトさんの家からも油揚げが香っている。裏庭に回って驚く。
コンタがいたのだ。お稲荷様には稲荷ずしがあつてコンタは涎をた



(挿し絵・小出 茂)



新大願成就 身体健全

高尾登

※今後、新型コロナウイルス感染症の流行状況等により、実施内容が急遽変更となる場合がございます。御承知おき下さい。

電話 〇四二六六二二二五
FAX 〇四二五六四二九九
大本山 高尾山 薬王院 信徒部

高尾山火渡り祭
（令和四年三月十三日 日曜日）
当山では毎年三月第二日曜日に春を招く恒例行事として、祈祷殿火渡り本尊
ご寶前にて、高尾山修験道による火渡り祭が盛大に執り行われます。
火渡り祭とは、高尾山主大導師のもと、全国各地の霊山で修行を重ねた山伏が、
一心に諸願成就の祈りを捧げる、関東屈指の大祈祷法要であります。
この浄行にあたり、御信徒の皆様方より柴燈大護摩供にて供される、御本尊・
飯繩大権現様の功德を顕す御壇木のご志納を一本二万円にて募っております。
ご信徒の皆様、並びにご講中の講員様方におかれましては、高尾山の浄行に大い
なるご信助を賜りますよう、謹んでお願いを申し上げます。
尚、ご志納の証として、ご芳名を薬王院参道に一年間掲示致します。御志納方法
についての詳細は、高尾山薬王院信徒部までお問い合わせ下さい。

柴燈大護摩供御壇木特別志納御案内

お知らせ



高尾山では、御壇木御志納の申し込みを、お電話・
ファックス等で受付けております。
高尾山報の二月号に同封いたしました、郵便振替
「払込取扱票」を利用してもお申し込み頂けますよ
う便宜を図りましたので、よろしくお申し込み申し上
げます。
「払込取扱票」でお申し込みを頂く際に、願意
（お願い事）が未記入でご連絡がつかない場合、「身体
健全」とさせて頂きます。
また、火渡り祭の時にお名前を読み上げますので、
フリガナの記入もお願い致します。
尚、「払込取扱票」は、高尾山報助成金の振替にも
ご利用いただけます。

新型コロナウイルス感染症終息祈願
高尾山火渡り祭開催のお知らせ

3月13日(日)午後1時より 於・山麓祈祷殿大広場

国土安隠

疫病退散



火渡り祭「なで木」の功德

「なで木」とは御本尊様の
大慈大悲の御手であり
ます。
年齢・氏名を御記入
の上、健康な方は益々
壮健であるように、お身
体に病の生じている方は、
御本尊様を念じながら
「なで木」でその患部を
撫でさすり下さい。
高尾山火渡り祭におい
て、柴燈大護摩供の護
摩木として山伏により、

火中に供されることで、
身体健全・息災延命を
祈念して御本尊様より
お加持を賜り、病魔を
滅する御加護をいただき
ます。



なで木料 一座二百円

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を
行っております。遠方の御信徒や、参拝できない
御信徒の皆様のために、御護摩札の郵送をお受けし
ております。
手紙、FAX等での申し込みをお願いしてござい
ますが、「高尾山薬王院公式ホームページ」内の御
護摩祈禱の御案内からインターネットにて、直接
お申し込み頂くことが出来ますので、是非ご利用
頂けますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先 〇四二六六二二二五
「郵送御護摩係」まで



登山だより

三月行事日程

一日～七日

聖天秘供(聖天堂)

五日、十七日、二十九日

弁天様御縁日

八日

仏舍利詣り(仏舍利塔)

八日、十五日

御詠歌勉強会

(十時山麓不動院)

二十一日

飯繩様御縁日

神徳報謝百味飯食供

(九時大本堂)

二十六日

月例写経会

(十三時半山麓不動院)

二十七日

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

毎日の お護摩奉修時間

(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分

// 9時30分

// 11時00分

午後0時30分

// 2時00分

// 3時30分

ご講中・団体等御相談
下さい。



※今後実施が予定されて
おります、各諸行事につ
きましては、新型コロナ
ウイルス感染症の流行
状況によって、開催方法
が変更される場合や、延
期、中止を含めた対応と
なる場合があります。

三月十三日
高尾山火渡り祭
午後一時
山麓祈禱殿大広場

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

神徳報謝百味飲食供

御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯繩大権現様の日々の御
加護に感謝するために、御縁日である二十一日
に、沢山のお供物(百味)を捧げて、大般若経
六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り
行っております。

皆様の御志納を受け付けておりますので、
ご希望の方は問い合わせ下さい。

尚、法要終了後に大本堂にて百味供養の
御札を授与致します。

また、当日参加できない方にはお札の郵送も
受け付けております。

毎月二十一日 午前九時(於大本堂)
御志納金 一口 三千元以上



大般若経を守護する十六善神の図

◆お知らせ

高尾山薬王院では、新
型コロナウイルスの感染
予防を図る為、境内各
所への消毒液設置・換気・
職員のマスク着用などの
対策を実施しております。

御来山の皆さまにおか
れまして、手洗いや咳
エチケット等の予防対策
情報に十分留意されませ
うようお願い申し上げます。

高尾山報助成金

御志納のお願い

当山では、大護摩修行
や星祭り等により御縁を
結ばれた御信徒様に高尾
山報を送っております。

引き続きご愛読され
ますよう、皆様方の助成
金御志納をお願い申し上
げます。

高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人 菅谷秀文
編集人 菅井倫浩
印刷 ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円